

水稲 さつき半ば適期田植えのための健苗づくり

良質米生産に向けてまず健苗育成を 育苗計画の目安

品 種	移植時期	水温	浸種	催芽	播種出芽	緑化	硬化
ハナエチゼン	4月下旬	10℃	12日	1日	2~3日	3~4日	20日
		15℃	10日				
あきざかり	5月上旬	10℃	10日	1日	2~3日	3~4日	16日
		15℃	7日				
コシヒカリ	5月中旬	15℃	7日				14日

浸種

浸種は河川やため池の水は雑菌が多いので使用せず井戸水または水道水を使用します。

最適な浸種水温は15℃で、期間は7日間が基準ですが、ハナエチゼンはやや長めとします。水温は20℃以上にならないように注意して下さい。

浸種開始から3日間は水を取替えず、その後は毎日交換します。

催芽

温度は30℃で24時間程度育苗器に置き、鳩胸状態で揃えます。

芽や根を伸ばしすぎると播種時に引っ掛かり、均等に播種できないので注意して下さい。

播種、出芽

播種量は乾燥粉で150g(催芽粉で188g)が基準ですが、コシヒカリはやや少なめとなります。

密植、高温、多湿の条件下で行われる箱育苗は病原菌の活動に好適な環境を与えているため、いったん発病すると急激に蔓延し、被害が増大します。発生してからの防除では手遅れになるので、播種後に予防のためタチガレースM液剤またはダコレート水和剤を1箱あたり500cc灌注して下さい。

病害の発生、蔓延防止のため育苗器の温度は上げすぎず、30℃程度で行います。

また、芽を伸ばしすぎないように注意して下さい。

緑化

苗の良否(苗丈、根張り)は育苗期の前半に決まります。

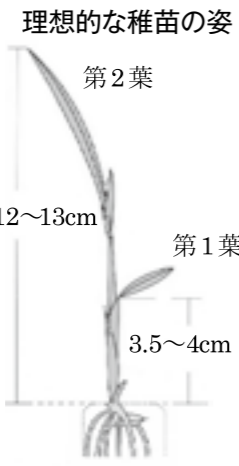
出芽室から出した後は、低温にあわせないことが重要です。早急にハウスに入れて保温して下さい。

また、急に強い光に当たらないように、ハウスに並べた後は苗が黄緑色になるまで2日程度は被覆資材をかけます。

緑化期の温度は、昼間20~25℃、夜間15~20℃を基本とし、5℃以下または32℃以上にしないように管理します。

コシヒカリは伸びやすいので、やや低めの温度管理を行います。

緑化期から硬化期にかけて、各種苗立枯病の発生を



防止するため、ハウス内の過湿に留意しハウスの換気を行って下さい。

硬化

硬化期のハウス内適温は、昼間15~20℃、夜間10~15℃です。

苗の生育状況や床土の乾き具合(苗の葉先に露玉があるか等)を常時観察したり、天候を見ながら灌水を行って下さい。

健苗づくりのための灌水のポイントは、

- ① 午後の灌水は過湿を招くので、午前中に行う。
- ② 灌水する回数は1日1回とし、タップリ行う。
- ③ 硬化期前半は灌水量をやや少なめに、後半は多めにすることです。

また、移植の3~4日前からハウスサイドのビニールを開放し、外気に馴らすようにして下さい。

圃場準備

代かきは少なめの水で均平を主に掻きすぎないように行い、その後湛水し土が落ち着くまで砂質土で短め、粘質土で長めにおきます。

田植作業

適正な育苗日数で、緑色の元気な苗を適度は深さに植えつけて下さい。

下葉の枯れ上がった軟弱徒長苗、葉の黄色い老化苗などで、太植え、深植えすると、初期生育や分けつを大幅に遅らせ、穂揃いを悪くするなど、収量・品質・食味まで悪影響を及ぼします。

栽植密度は坪当たり50~60株程度、1株3~4本の細植えとし、極端な疎植や密植は避けます。

苗箱にはイネミズゾウムシ等初期害虫やいもち病、紋枯病予防のため、適切な箱施薬剤を選んで散布しておくことが必要です。

田植え後の水管理

田植え後はすぐに水を張り、活着までは保温のためやや深水とし、活着後は浅水とします。

特にこの時期は風の強い日が多く、水がないと植えたばかりの苗が傷んでしまい、大幅に初期生育が遅れます。常に天候に注意し強風が予想されたらただちに深水にする等、苗を守って下さい。

また、近年田植えと同時に除草剤を散布する場面が多くなっており、除草効果を高めるためにも田植え後は水を切らさないことが重要となります。

野菜

○パレイシヨ

●芽かき

草丈が5cm程伸びてきたら、**優勢(生育良好)な芽2本を残して、他の芽は土際を軽く手で押さえ、もう一方の手で全て引き抜いて下さい。**

●土寄せ・追肥

土寄せは、①土壌の通気性を良くし、肥料成分の分解



を促進させ、子イモの着生数を増加させるとともに、②緑化イモ、株の倒伏の防止、③病虫害の侵入を防止するために行う重要な作業で、最低2回必要です。**1回目の土寄せは草丈が10cm程度になったら、4cmほど行って下さい。2回目は草丈が20cm程度になった頃に行いますが、土寄せ前に畝に沿って追肥をして下さい。肥料はそさい5号を1株当たり5~7gを目安に施用して下さい。**

○タマネギ・ニンニク

●病害防除

近年、全般に大敵のべと病やさび病の発生は多くない状況にありますが、気温、地温が上昇する今月上旬以降、注意が必要です。畑をよく観察し、発病がみられたら早期防除を行って下さい。

【べと病】

《発生しやすい条件》

・春に例年より暖かくなるのが早い年は、4~5月に多雨に遭遇すると発生が多くなります。

・湿度95~100%、気温10~20℃で発生しやすく、とくに15℃くらいで葉上に露滴が形成されるときに発生しやすくなります。

・発病がみられた苗床や圃場で連作すると発病が増加します。

・付近にネギ、ワケギがあると、そこからの感染で発生が多くなります。

《防除》

(タマネギ)…ジマンダイセン水和剤かヨネポン水和剤の500倍液を散布して下さい。

(ニンニク)…予防としてZポルドーの500倍液を散布して下さい。

また、農薬を極力使いたくない方はお酢や木酢液にトウガラシや鷹の爪を漬け込んだものを散布して下さい。お酢は30~50倍、木酢液は500倍を目安に希釈し、液が滴るほどかけて下さい。ただし発生初期でない効果は薄い上、酢の臭いがきついのでご近所への配慮が必要です。

【さび病】

《発生しやすい条件》

・周辺にニンニク、ネギなど本病の発生が多い作物が植えられている圃場では発生しやすくなります。

・胞子の発芽と形成は24~27℃が適温で降雨量の多い時に多発し、窒素過多で発病しやすくなり、肥料切れでも発病が助長されます。バランスのよい施肥を行うことが重要です。



《防除》

(タマネギ)…ジマンダイセン水和剤の400~600倍液を散布して下さい。

(ニンニク)…ストロビーフロアブルの2,000倍液を散布して下さい。

べと病同様、酢も効果はあります。詳細はべと病の記載内容を参照して下さい。

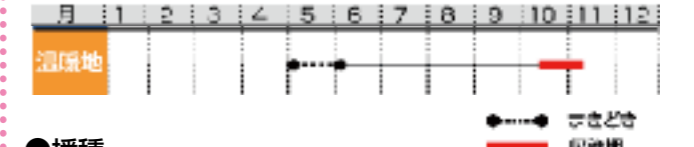
●野菜残渣の除去

昨年も記載しましたが、冬野菜の栽培跡圃場を見ると、本年の降雪に伴う生育不良等により収穫できなかったダイコンやハクサイ等がそのまま放置されているのが目につきます。これらを長期間そのままにしておくと、**病害虫の恰好の棲家**になってしまいますので、早急に抜き取り、畑を清潔に保って下さい。

●施設野菜

天候が非常に不安定な時期となるため、こまめな温度管理が必要となります。油断していると天気が変わって思わぬ大損害を受けることもありますので、十分注意して下さい。

○ラッカセイ



●播種

1か所に2~3粒まき、1cm以上の覆土します。間引いて本葉が2~3枚になったら1本立ちにしてください。

●管理のポイント

1. 石灰が欠乏すると空灰が出やすくなるので、必ず石灰をやってください。
2. 側枝が伸び始めたころ、カリ分の多い化成肥料を適量施用して下さい。
3. 窒素過多になると、つるボケ状になり、莢のつきが悪くなります。
4. 畑が乾いたら適宜灌水して下さい。
5. 子房柄が土中に伸びるので、土寄せを行って下さい。
6. 窒素肥料が多いと、株が茂りすぎて風通しが悪くなり、病害虫が発生しやすくなります。

●収穫

莖葉が黄変し、下葉が枯れたら収穫適期です。試し掘りして、莢に網目が入り肥大しきっていたら収穫し、数日畑に広げてよく乾かします。収穫の約20日前、莢がほぼ肥大したころに掘り上げ、子実を莢ごと塩ゆでして、実をとり出して食べることもできます。種子用に使う場合は、莢つきのまま貯蔵し、播種前に莢からとり出します。

次回(5月号)は...

水稲・野菜・果樹・花卉の管理